

未知なる生命現象の可視化をめざして

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

第10章 未知なる生命現象の可視化をめざして

(財) エム・オー・エー健康科学センター

研究顧問 菅野 久信 医学博士、 研究部長 新田 和男 医学博士

(財) エム・オー・エー健康科学センターは、1991年に元千葉県がんセンター研究部長であった、新田和男が理事長となって、「人間が本来備えている自然治癒力を活かす自然順応型の健康法」に関する研究を行い、人々の心身両面の健康の増進に寄与するために設立された。一方、産業医科大学名誉教授であった、菅野久信が1991年より、MOA九州生命科学研究所（福岡）の所長として、「自然順応型の健康法」に関する研究を始めた。1995年に同研究所は、同財団に統合され、現在は、菅野久信は当財団研究顧問、新田和男は研究部長として研究を行っている。

設立以来、自然順応型の健康法のひとつである「岡田式浄化療法」や「外気功」等のヒトに与える影響を医学的および電気生理学的、生体光学的、臨床疫学的、東洋医学的アプローチで研究してきた。その結果は、国際生命情報科学会^{5),7-10),12),15)}はじめ、ISSSEEM¹⁶⁾、国際モンロー・ストレス会議、臨床神経生理学会¹⁷⁾等で報告し、積極的に研究活動を行っている。

〒413-0033 静岡県熱海市熱海1767-15
電話：0557-86-0663 FAX：0557-86-0665
E-mail：sugano@mhs.or.jp

1 はじめに

人間は、本来自分自身の健康を維持する力や、病気になった際自ら治そうというシステムを持っている。故池見酉次郎九州大学名誉教授は、自然に癌が退行した31名を調査した結果、24名において、宗教的な目覚めや実存の転換、家族の愛、ライフワークに対する没頭によって、ホルモンや免疫等の変化がおきて、癌が自然に退行したと報告している。同博士は、さらに研究を進め、こころと体の不思議を東洋医学と西洋医学を統合的に研究して、Self-healing Vital Energyとしての「気」の存在や働きについてのモデルを提唱した¹⁾。

自然順応型の健康法の研究する上で、Self-healing Vital Energyの働きを客観的に評価する方法を確立することは、ヒトの健康維持や増進に繋がると考える。

そこで、我々はSelf-healing Vital Energyの生体に及ぼす影響について、「岡田式浄化療法」や「気功」等を用いて研究を進めている。

「気功」については、他の章や参考文献²⁾を読んでもらいたいが、「岡田式浄化療法」に関してここで少し説明する。「岡田式浄化療法」は、1930年代頃に、宗教家である岡田茂吉が発見した方法であり、「日本医術」あるいは「浄霊」とも呼ばれている。ヒトには、「浄化作用」という自然治癒能力があり、「岡田式浄化療法」は「浄化作用」を促進させるものであると説明している。この療法を用い、HIV患者のCD4リンパ球の上昇やアトピー性皮膚炎の改善等が報告されている³⁾。

Vital Energyの効果を計測する場合、被験者の暗示作用の影響や、アーチファクトの除去等を考慮して実験計画を組む必要がある。また、様々な角度からの計測とそれらを総合的に評価して研究を進める必要

未知なる生命現象の可視化をめざして

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

がある。

次の節から示す内容は、上記の問題点を考慮して、生理学的な見地（脳機能計測および自律神経機能計測、指先容積脈波計測、矩形パルス応答電流計測法、熱コリ分布計測）、生体光学的見地（生物フォトン計測およびコロナ放電写真）、公衆衛生学的見地から、「岡田式浄化療法」の効果が計測および評価された結果である。

2 脳機能計測からのアプローチ

菅野 久信・内田 誠也・津田 康民

脳波とは、ヒトが活動しているときに頭皮上から計測される電圧の変動である。その脳波には、変動の周波数の違いによって、 δ 波および θ 波、 α 波（細かく分けて α_1 波と α_2 波）、 β 波と分けられる。睡眠時には、 δ 波および θ 波が多く現れ、 α 波は覚醒安静時に多く現れ、 β 波は脳が活発に活動しているときによく現れる。特に、ヒトの心身がリラックス状態にあるとき、 α 波が強く現れると言われている。

この研究⁴⁾は、「岡田式浄化療法」を施術された被験者の脳波がどのように変化したかを示す。まず、被験者は、暗示効果がないようにヘッドホンとアイマスクをして、リクライニングシートに座った。また、実験を開始する前に、被験者には合図があったら施術が開始されることを伝えた。しかし、実験では施術者は2回の施術を行い、一回の施術は何も合図をしないで、もう一回は合図を行って施術を行った。つまり、暗示作用がない施術の効果と暗示作用が含まれた施術の効果が比較されたということになる。暗示有無の順序は被験者ごとに変えて行った。

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

その結果の一例を図1に示す。折れ線グラフは、1分おきの α 波量の変化を示し、図中のマップは矢印で示した時刻の α 波のトポグラフを示す。このトポグラフは、一つ一つがヒトの頭皮上の α_2 波の分布を表し、上方向が前頭部、下方向が後頭部を示す。

施術に同期して α 波の増加が見られている。つまり、被験者の暗示の有無にかかわらず、施術によって被験者がリラックスしたことが推測される。

そこで、この実験を10名の被験者で行い、

統計的に解析した結果を図2に示す。施術開始から1分まで、1分～2分、2分～3分の α_2 波の平均変化率のトポグラフとその変化に対する有意な変化であることを示すT検定値のトポグラフを示す。

暗示ありの場合、施術を受けはじめた直後の1分間で α_2 波が後頭部を中心として全体的に上昇し、2分後には有意な変化領域が頭部全体に及んだ。一方、暗示無しでは、若干遅れて1分から2分後にかけて前頭部を中心とした α_2 波の上昇がみられ、3分後においては有意な変化となった。

この結果より、 α_2 波の上昇に関して、暗示の有無による部位および

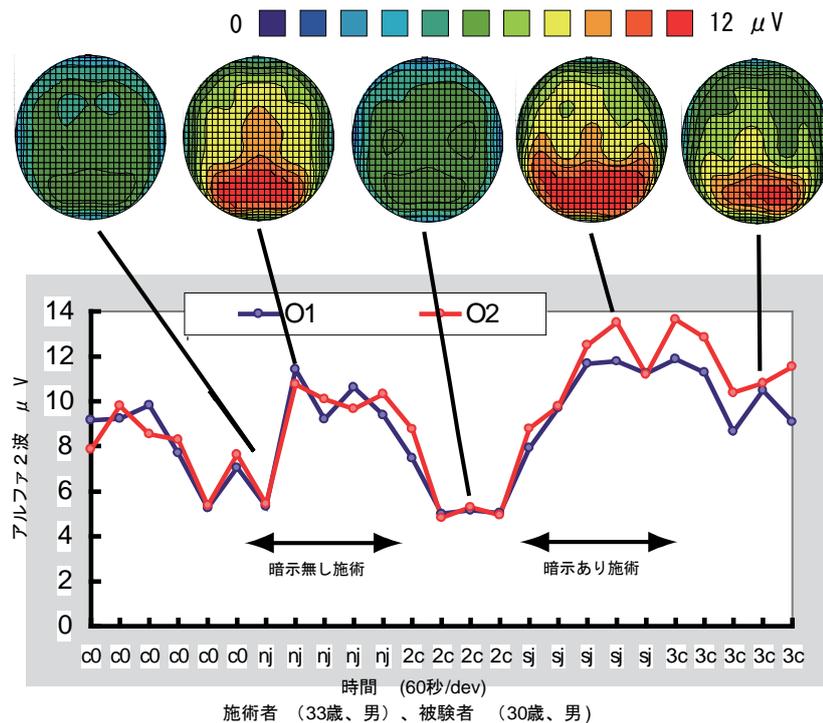


図1 「岡田式浄化療法」施術されたときのアルファ2波の変化

未知なる生命現象の可視化をめざして

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

時間的な違いがあった。暗示がある場合、施術を受けると迅速に変化し、暗示がない場合遅れて変化した。つまり、暗示作用によって施術を受けると意識の変化が α 波の増加をおこさせたものであると考える。しかし、暗示作用が無くても α 波が増加したことは、Vital Energyの直接的な作用と推測される。

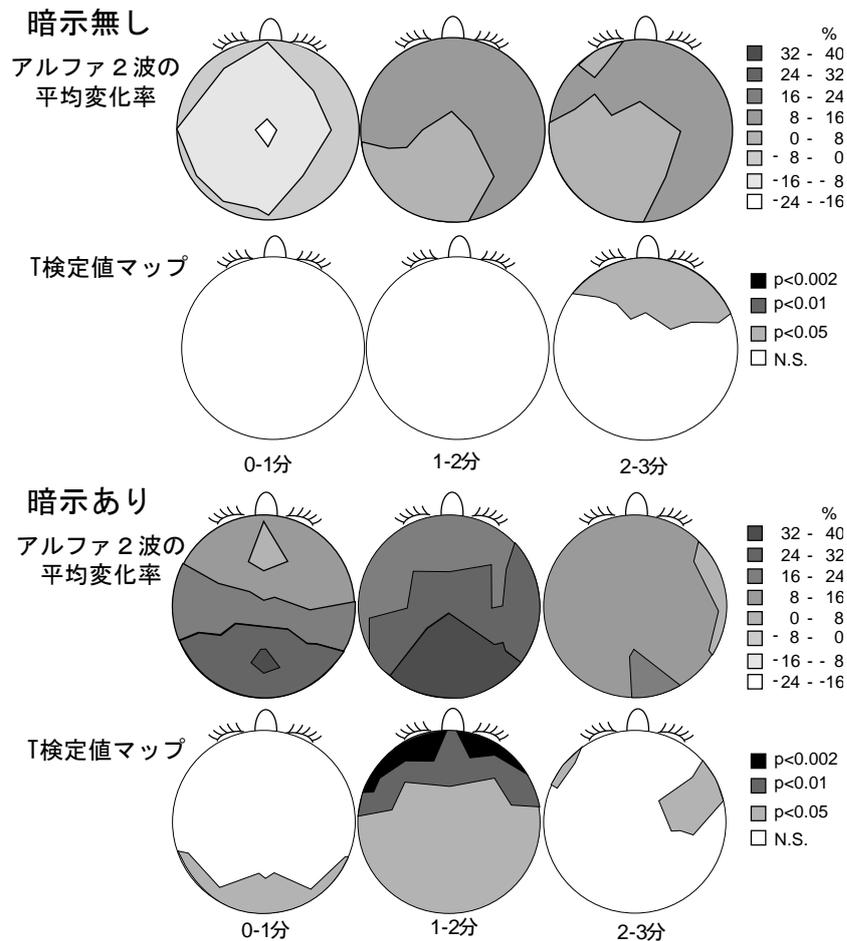


図2 10名被験者のアルファ2波を統計処理したトポグラフ

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

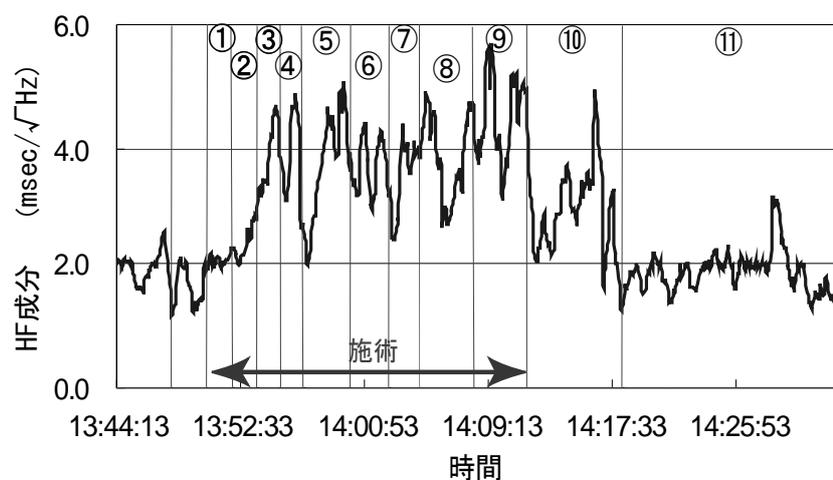
3 自律神経機能計測からのアプローチ

内田 誠也・上野 正博・新田 和男・菅野 久信

自律神経機能とは、生体にとってもっとも基本的な循環・呼吸・代謝・分泌・体温維持・排泄・生殖などを自律的に調整する神経機能である。その自律神経は、交感神経と副交感神経とがあり、シーソーのようにバランスを取りながら、生体の恒常性を維持している。例えば心機能に関して、興奮しているときは、交感神経が優位な状態であり、心拍数が早くなる。逆に、リラックスしているときは、副交感神経が優位な状態であり、心拍数が減少する。

このように、心拍数は、自律神経機能の影響を受けて、常にゆらいでいる。このゆらぎが周波数解析されると、早くゆらぐ成分（HF）と遅くゆらぐ成分（LF）に分けられる。HF成分は、副交感神経活動に関係し、LF/HF成分は交感神経活動に関係している⁴⁾。

この節では、「岡田式浄化療法」による心拍ゆらぎの変化を計測した結果を示す⁵⁾。



- ①：前頭部、②：左鎖骨部、③：右鎖骨部、④：腹部、
⑤：後頭部、⑥：左肩、⑦：右肩、⑧：左背面腎臓部、
⑨：右背面腎臓部、⑩：施術終了後安静状態、
⑪：ストレス付加のための質問

図3 「岡田式浄化療法」を施術された被験者のHFの変化

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

図3は、「岡田式浄化療法」を施術された被験者のHF成分の変化を示す。施術は幾つかの施術効果が高い部位に向けて行われ、図中の数字の範囲はそれを示す。また、最後に被験者に対し、心理的なストレスをかける質問も行った。施術と同期したHF成分の増加とストレスに対するHFの減少が顕著に見られる。施術によって、副交感神経活動が増加し、ストレスによって交感神経活動が増加したことが考えられる。

そこで、施術による副交感神経活動の増加は暗示によるものか、そうでないのか、という実験を試みた。

まず、施術者は被験者に分からないように施術を行う実験、2つめは施術者が被験者に施術の合図を行って施術を行わない実験、3つめは、施術者が被験者の側に立つのみの実験が行われ、これらの結果が比較された。全ての実験で被験者は、ヘッドホンおよびアイマスクを付けて、うつ伏せで、ベッドの上に横になった。つまり、1番目の実験は暗示無し施術の効果、2番目は暗示のみの効果、3番目は横になるだけの効果を調べることとなる。施術者は、「岡田式浄化療法」の施術資格を持つ医師がすべて行った。

図4は、13名の被験者に関

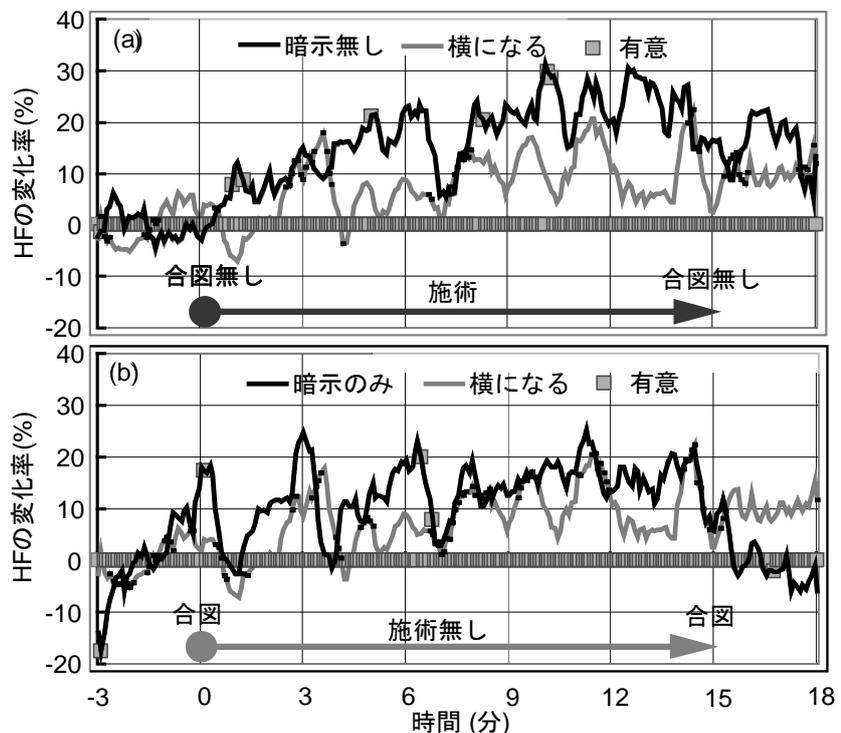


図4 暗示無し施術および暗示のみ、横になった時のHFの平均変化率 (n=13)

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

して、3つの実験を行って、統計的に比較したHF成分の結果である。横軸は時間で5秒おきのデータが示されている。灰色の折れ線グラフが横になっただけのHFの平均値の変化を示す。若干のHFの上昇が見られるのは、横になっただけでリラックスして副交感神経優位になったためと考えられる。上図黒色の折れ線グラフは暗示無しの施術のHFの変化を示し、施術が開始されると徐々に増加し、何もしない場合と比較しても、より大きく増加する傾向にあった。下図黒色の折れ線グラフは暗示のみのHFの変化を示し、暗示開始直後は、横になるだけの変化より若干増加する傾向にあったが、後半には差が見られなくなり、暗示終了後は逆に減少する傾向にあった。

この結果は、「岡田式浄化療法」は自己暗示なしでもヒトの副交感神経活動を上昇させる働きがあることを示唆するものである。

4 指尖容積脈波からのアプローチ

津田 康民・白水 重憲・菅野 久信

心身の健康状態を評価できる客観的な指標の確立は健康管理上非常に重要であり、非侵襲で簡便に測定できれば理想的である。心はどこにあるかというアンケートを取ると、医学を専門に学んだ人以外は心臓と答える。それほど心臓の鼓動は心の状態により変化する。また、東洋医学では手首の脈を診て全身の状態を診断する脈診が伝統的に活用されている。

1628年にW. Harveyが血液循環の原理を発見して以来、医用工学分野では循環器系の健康度の測定および循環状態のモニタを目的として血圧をはじめ様々な方法が工夫されてきた。脈波の定量的な測定法と

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

して指尖における末梢血流の変動をヘモグロビンの近赤外光吸光特性を活用して測定する光電容積脈波法が活用されている。

指尖容積脈波形から健康度の有効な指標を抽出するため、様々な解析法を検討してきた。波形の回路モデルへの適用や、FFT解析、カオス解析、加速度脈波による血管年齢推定等を検討し、その都度様々な学会へ報告してきた。

図5に岡田式浄化療法施術前後各25秒間の脈波形から再構成されたカオスアトラクターの一例を示す。この形状の特徴は、健康度を反映して変化するとされている。施術実験、擬似施術実験、対照実験ではそれぞれ異なる変化の傾向を示した¹²⁾。特にアトラクターの“しっぽの角度”は加齢とともに低下する傾向が見られ、血管の柔軟性（動脈硬化の進行度）を反映していると考えられている。この特徴は脈波形の調波解析にお

ける6次のハーモニクスとも生の相関が強い。こうした特徴は加速度脈波のピークの比率から計

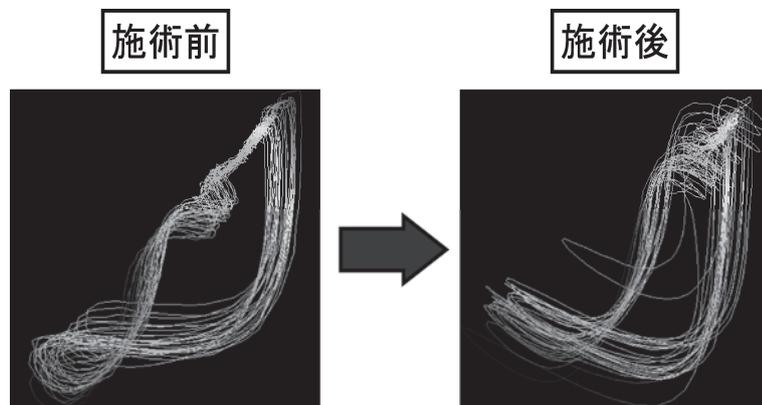


図5 岡田式浄化療法による脈波カオスアトラクターの変化

算される血管年齢とも相関が強い。

健康増進効果の指標としては、動脈硬化の進行度の目安として活用されている血管年齢が分かりやすいため、花が心身に与える影響について公開実験を行い、血管年齢の変化を調べた¹³⁾。2000年に淡路花博会場で花の観賞による血管年齢の変化を調べ（図6）、実年齢より高い血管年齢を示した165名の64%に改善がみられ、平均約2歳有意に

未知なる生命現象の可視化をめざして

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

若返る結果が得られた。また、2001年には北九州博覧祭会場で公開実験を行い、花をいけることで、64%が改善、平均約3歳有意に若返る結果が得られた。

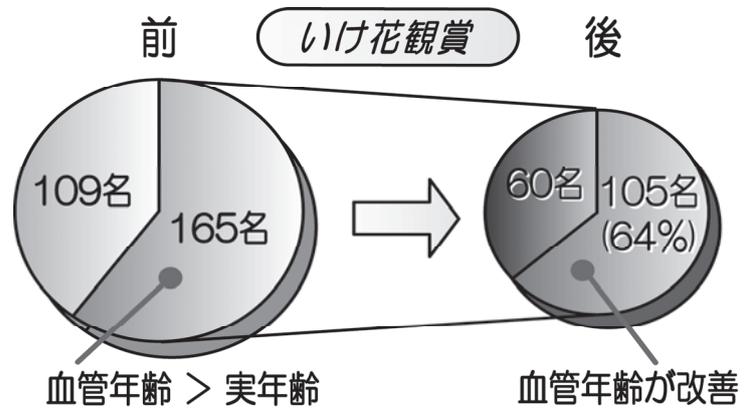


図6 いけ花の観賞による血管年齢の変化

5日間の岡田式浄化療法を中心に花や茶の湯、美術観賞等の芸術療法、MOA自然農法産の自然食等を取り入れた健康増進プログラムに参加することで有意に若返るという結果も得られている。

そこで、更に詳細な検討のため、血管年齢を連続測定するシステムを新たに作成し現在研究を進行中である。図7は顕著に変化した例で、2分間の安静後、医師が患者の左腎臓部に8分間施術を行った際の一脈拍ごとに計算した血管年齢の時系列である。

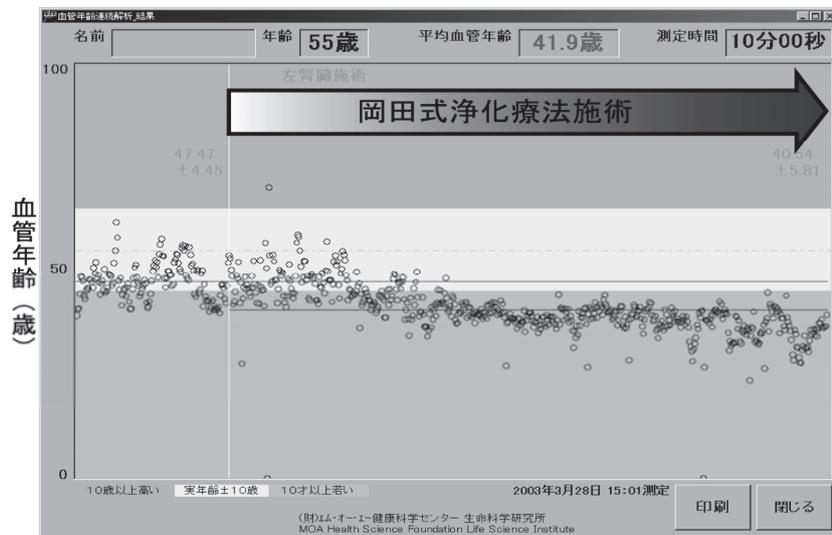


図7 岡田式浄化療法による血管年齢の変化

5 矩形パルス応答電流計測からのアプローチ

蔵本 逸男・内田 誠也・津田 康民・菅野 久信

矩形パルスを人体の皮膚にかけると、応答電流が発生する。この電流は、電圧付加直後に流れる電流（BP）と、電圧付加後の安定した時に流れる電流（AP）に分けることができる。一般的に、この計測はAMI（経絡臓器機能計測）と呼ばれている⁶⁾。我々の研究では、APは皮膚の発汗に相関していることから、交感神経性皮膚反応と関係があり、BPは抹消血流量の変化による真皮層の電気的特性に起因していると考え⁷⁾。

この研究では、「岡田式浄化療法」の施術がこの計測のAPおよびBPに与える影響を調べた⁷⁾。被験者の暗示作用を考慮して、4通りの実験を行った。被験者は、ヘッドホンおよびアイマスクをして、シールドルーム内のリクライニングシートにリラックスして座った。まず、施術者が被験者に合図をしないで、施術を行う暗示無し施術実験（n=36）、施術者が被験者に合図をしてから、施術を行う暗示あり施術実験（n=25）、施術者は施術を行わず、実験室内にいるだけの入室実験（n=18）、施術や施術者の入室がないコントロール実験（n=18）を行った。

その結果を図8に示す。図中各データは、暗示ありおよび暗示無し実験については、施術前後5分間のAPおよびBPの変化量、入室実験については入室前後5分間のAPおよびBPの変化量、コントロール実験についてはランダムな時刻を基準にして前後5分間のAPおよびBPの変化量を、縦軸AP横軸BPでプロットしたものである。例えば、施術前後で変化が無かった場合、原点付近に分布し、施術前後で大きく

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

変化した場合、原点から離れたところに分布することになる。

そこで、暗示あり施術実験の場合、APもBPも広く分布しており、施術によって、交感神経性皮膚反応および末梢血流の変化が見られた。暗示無し施術実験の場合、BPは広く分布しているが、APに関しては0付近に分布しており、暗示無し施術では末梢血流に変化があったと考える。入室実験およびコントロール実験では、APおよびBP共にほとんど変化しなかった。

被験者が施術を受ける際、自己暗示的な心理作用と直接的な施術効果に影響される。この結果より、自己暗示的な心理作用はAPに反映しやすく、直接的な施術効果はBPに反映しやすいと考えられる。

ただ問題点として、施術によるBPの変化の方向性が一様でなく、被験者によって施術によって増減している。このことは、被験者の自律神経機能の初期状態に依存すると考えられるが、今後さらに深く検討したい。

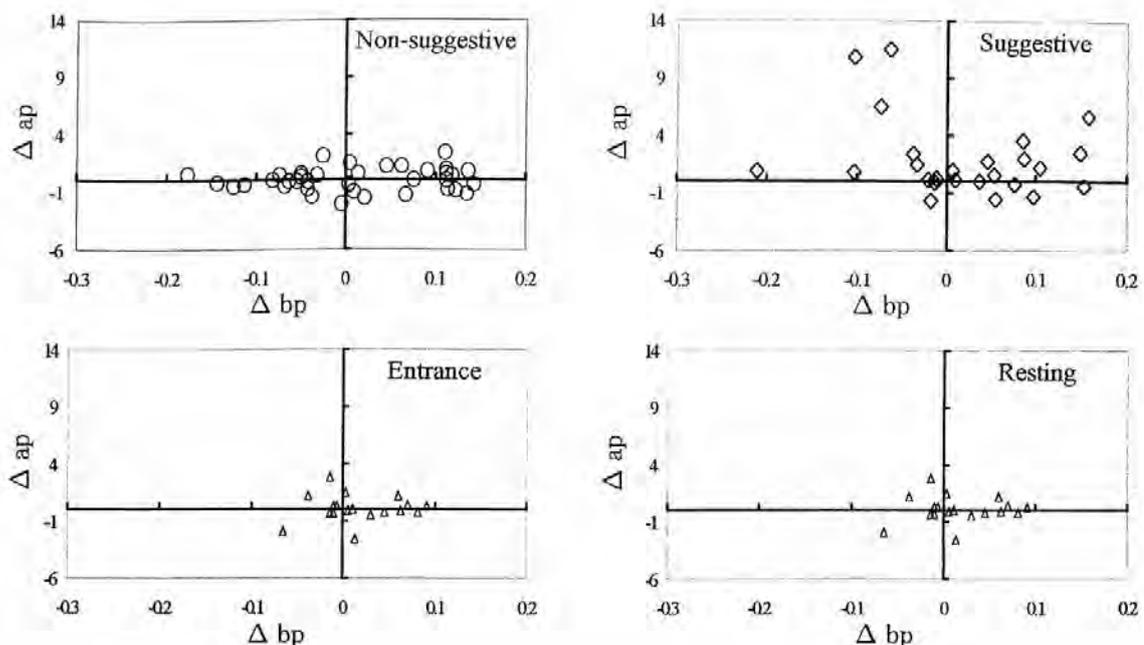


図8 矩形パルス応答電流計測法によるAPおよびBP値の変化
左上図は自己暗示無し施術、右上は自己暗示あり施術、
左下は入室のみ、右下はコントロールの結果を示す。

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

6 熱コリ分布評価からのアプローチ

津田 康民・内田 誠也・菅野 久信・牧 美輝

本研究では、浄化作用という自然生理作用の存在を顕在化させ、その自然良能（自然治癒力）を最大限に活性化する方法として提唱された岡田式浄化療法の効果を検証する端緒として、熱・凝りを数値化することで、その変化を視覚化・定量化することを試みた⁸⁾。

被験者の熱と凝りの分布をペンタブレット式パソコン画面上の人体図に塗り絵の要領で入力し、その面積を集計できる熱・凝りチェックソフトウェアを開発し、共著者が院長を勤めるクリニックに導入した。同クリニックが指導している健康増進セミナーに参加した83名の被験者を対象にして、セミナー体験前後の熱コリの分布および変化がそのソフトウェアを用いて数値化された。

セミナーの参加者は5日間で約26時間に涉って徹底した岡田式浄化療法の施術を受け

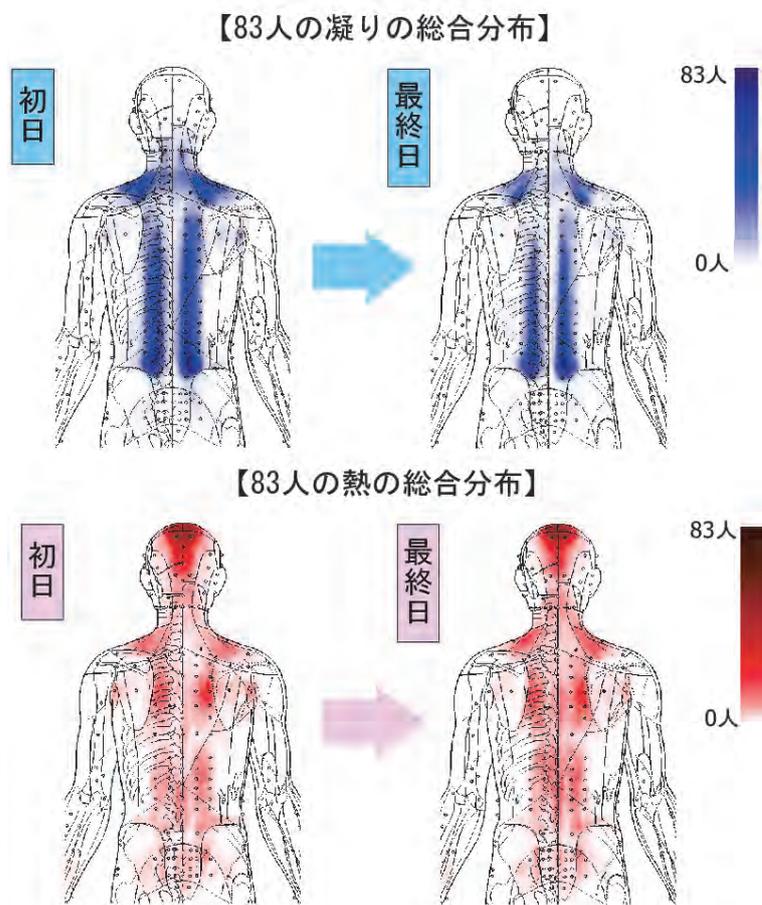


図9 83名全員の熱・凝りを加算平均した分布の変化

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

た。熱・凝りのチェック方法は、セミナー初日と最終日に医師の診察・探査を基に、鍼灸師とタイ古式マッサージ師が探査し、その領域を決定し、人体図へ記録した。

図9に83名全員の熱・凝りを加算平均した分布の変化を示す。色が濃いほどその部位に熱・凝りがある人が多い事を示す。凝りは全体的に減少し、熱は部位毎に変化の様子が異なり、その分布に変化が見られた。

図10は、参加者一人毎の分布の変化の傾向を調べたグラフである。初日の熱・凝りの面積に対して10%以上増減した場合を変化とみなした。凝りは全員が減少し、熱は30名が減少、10名が増加、8名が変化無しであった。

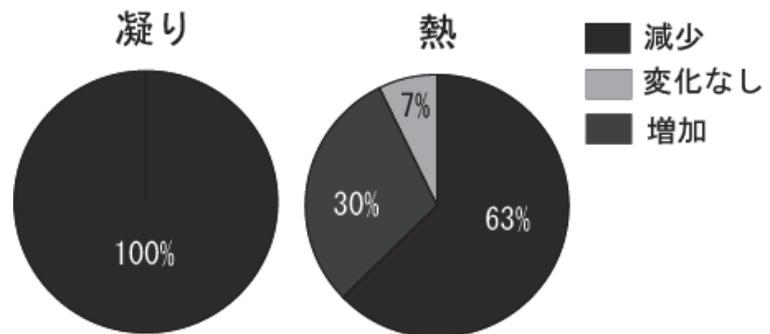


図10 83名参加者一人毎の分布の変化の傾向

次に部位毎の熱と凝りの変化を調べるため、四面図の各部位に相当する領域の面積を合計し、施術前後の変化を数値化し、統計処理を行った(図11)。熱は頭部、肩、背中

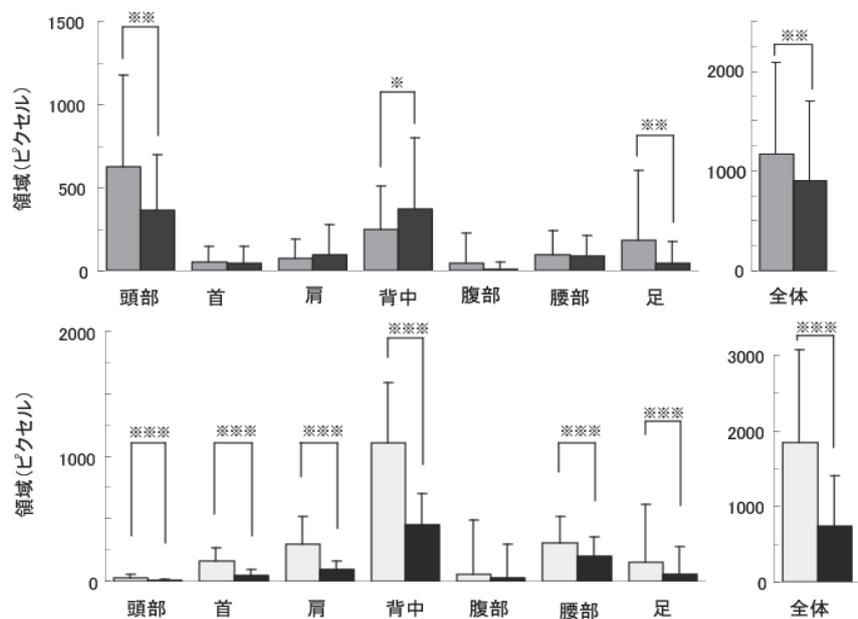


図11 各部位ごとの、施術前後の熱コリ面積の変化 (n=83, Paired t-test)

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

に多くある傾向にあり、肩部、背中、手足以外は有意に減少した。凝りは肩部、背部、腰部に多く、腹部以外は有意に減少した。

図10の増加した10例や、図11の背部の熱に有意差がない事は、凝りが解消される過程として発熱が見られる現象を捉えていると考える。

岡田茂吉師は浄化作用を血液中の毒素（不純物）が身体の各職所に集溜・固結する過程〔第一浄化作用〕と毒素の固結（凝り）を発熱により溶解し、排泄する過程〔第二浄化作用〕に分けて説明している。今回の研究結果は、岡田式浄化療法の施術により、熱や凝りが解消される現象や、凝りの解消過程における発熱現象を熟達者が触診することで捉えられることを示していると考ええる。

この手法の抱える根本的な問題として、熱や凝りの範囲を熟達者が主観により決めている点がある。

今後は、例えば熱はサーモトレーサーを併用する等、より客観的な指標と比較検討することで、触診の妥当性を検証し、臨床データを詳細に検討する事を通して浄化作用の実証、岡田式浄化療法の効果の実証を進めて行きたい。

7 コロナ放電写真計測からのアプローチ

内田 誠也・津田 康民・菅野 久信

コロナ放電写真とは、電極に高電圧パルスをかけると電極の近傍で発光現象が起り、この発光を写真に感光させたものである。別名、キルリアン写真とも呼ばれている。催眠や瞑想、鍼灸、ヒーリング等で、ヒトの指先におけるコロナ放電の形状や大きさ、色などが変化するといわれ

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

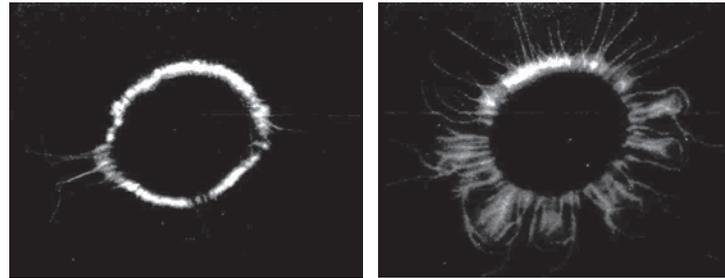
ている。図12の写真は岡田式浄化療法を施術された被験者の指先の写真と木の葉の写真を示す。このように、施術後のコロナ放電発光量の増加が見られた。

そこで、さらに厳密な実験解析を行うために、対照実験の計測と画像解析技術を取り入れて実験を行った⁹⁾。図13は実験方法を示す。まず2枚の木葉を同時に取ってきて、片方に施術を行い、その前後でコロナ放電写真を8枚ずつ撮影した。

対照実験として、同様に2枚の木葉を取ってきて、何も行わず、自然放置して、前後でコロナ放電写真を5枚ずつ撮影した。また、すべて現像は、同じロットで行われた。

その結果を図14に示す。何も行わなかった木葉では、発光量がさがるのに対し、施術を受けた木葉の発光量が維持されることが分かった。

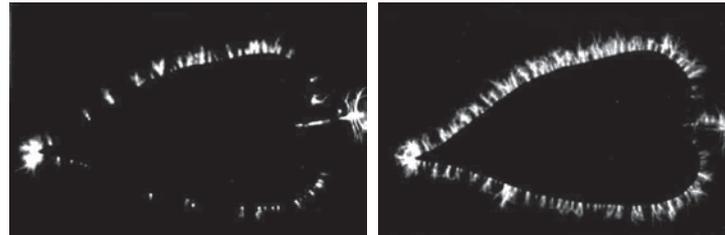
ヒトの指先のコロナ放電写真



施術前

施術後

木の葉のコロナ放電写真



施術前

施術後

図12 施術前後のヒトの指先と木の葉コロナ放電写真

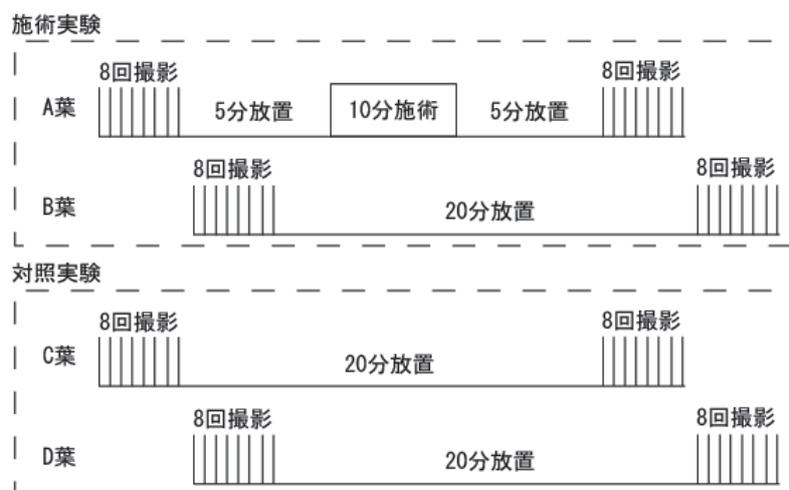


図13 施術実験と対照実験の木葉コロナ放電の変化

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

た。もし、発光量が木の葉の生命エネルギーに関係するものであるのなら、木の葉はなにもしなければ枯れていくはずなのに、施術によって生命力が維持されていることを示すものであるかもしれない。

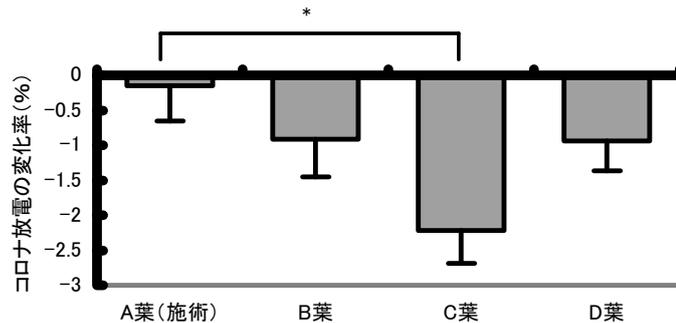


図 14 木の葉に対する施術効果を調べる実験方法

8 生物フォトン計測からのアプローチ

柳川 勉・坂口 弘征・上野 正博・新田 和男

生物フォトンとは、肉眼では見えない生体が発する極微弱発光のことである。月明かり、星明かり程度の明るさの 10^{-5} から 10^{-6} 倍の暗闇に置かれた生体は、はじめに蛍光やリン光を数分から数十分程度放出する。生命現象に関わる生物フォトンはこの初期発光のあとに観測され、植物では樹液、人においては血液を含む体液から出る¹¹⁾。

生物フォトンの起源を探るため、植物の葉に針で傷をつけてこの生物フォトンを観測したところ、傷口ではなく、傷口からしたたりおちる樹液が光った。この葉をすりつぶし、固相と液相に分離すると、図 15 のように発光の起源が明確になる^{10), 11)}。固液分離は発光寿命を極端に短くするので、液体部分がエネルギー源で、固体組織はそれを保護しているということがわかる。農産物の新鮮さの相違を生物フォトンで観測すると、はじめ古い方の発光が強いが、1日経過前後から逆転し、新しい

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

方が強くなる。古い方は傷口に過剰反応してエネルギーを使い果たし、傷口を癒すことなく乾燥して死んでいく。新しい方は傷口を自らの樹液で塞ぎ、生体機能を維持しつつ光り続ける¹⁰⁾。つまり生体機能維持力(生命力)が強い新鮮な農産物の方が、放出する生物フォトンの総数が多いと考えられる。

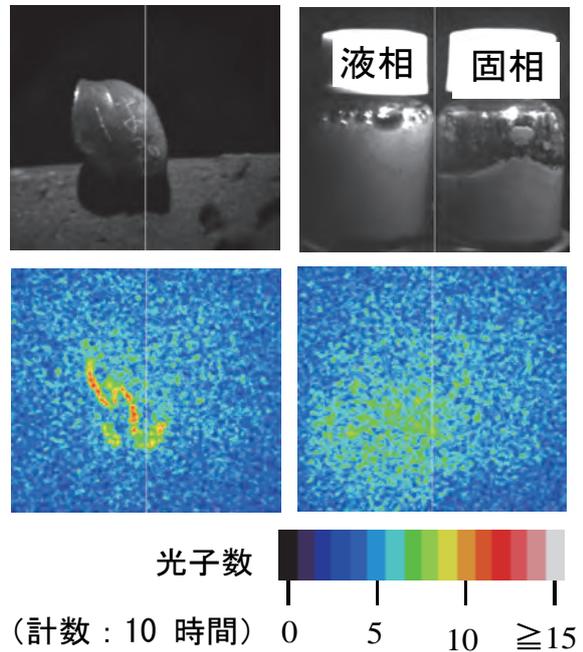


図15 傷をつけた櫛からの生物フォトンと遠心分離したあとのようす

MOA 自然農法産物と市販の慣行農法産物を比較すると、はじめは慣行農法産物の方が切り口からの発光が強いが、一日経過すると逆転し、自然農法産物の方が強くなる(図16はキュウリの場合)。このことは、

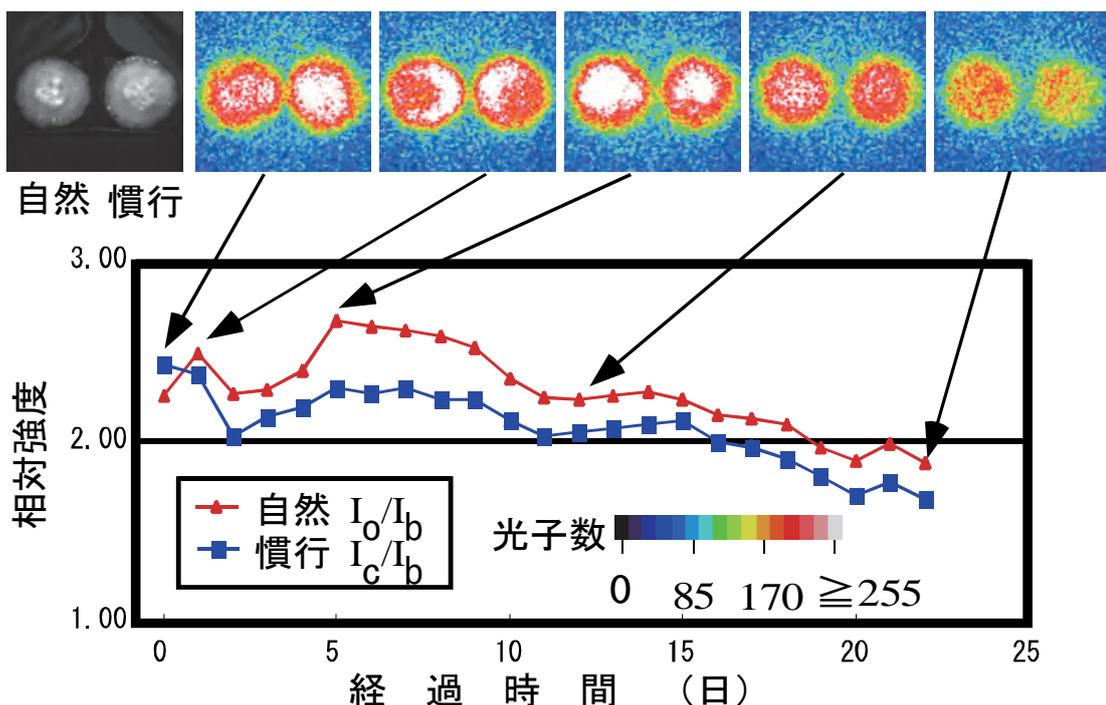


図16 農法の異なるキュウリ切断面における生物フォトン

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

自然農法産物が発するエネルギーが慣行農法産物より強く、生命力に溢れているということを表す¹⁰⁾。異常時の保持エネルギーの違いがそのまま生命力に影響するものであるとすれば、自然農法産物がアレルギー疾患などの改善に有効だとされるのも、無理からぬことだとも言える。

人も植物と同様、傷口や皮膚疾患など皮膚表面近くの異常部、体液が露出するところで発光が観測されるが、正常に復することで発光は弱まっていく。人が静止できる時間は限られており、十分な積分時間が確保できないことから、極微弱発光の観測は植物より不利である。発光を促進するのに、火傷のあとが残らない温灸が有効であることを見出し¹¹⁾、これを用いて、人体の変化を観測し、臍上温灸を用いた10分間の施灸後、岡田式浄化療法（日本医術）による効果を観測した。図17のように施術中に限った体温上昇（体温測定はサーモグラフィーによる）とフォトン数の顕著な減少が同時観測された。同期しながらエネルギーとして逆向きの変化となるこの現象は、明らかに岡田式浄化療法の効果であり、偶発的なエネルギー変化では説明できない^{10), 11)}。個人差はあるが、数例の実験でこの傾向は一致している。

岡田茂吉師は、怪我や病気を「健康を維持するための浄化作用」と説き、体内の毒素や不純物の集溜に続き、これを体外に排出するための熱や痛みが伴うとしている。上述の結果は、岡田師のこの持論との一致を示唆しているが、結論を下すには更なる検証が必要だと思われる。

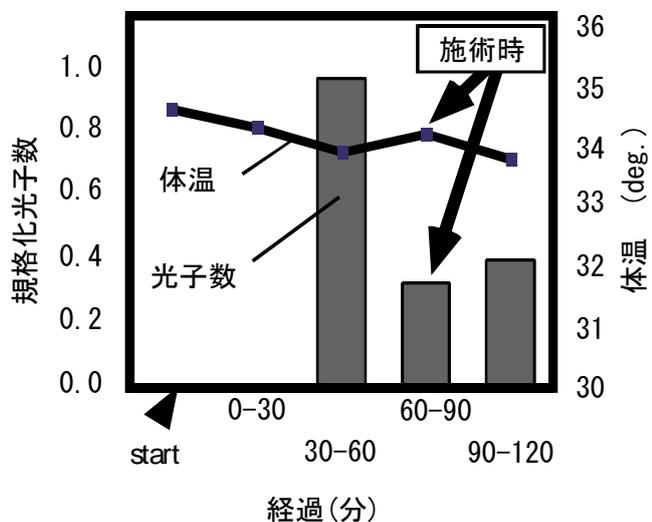


図17 発光強度と体温の変化における岡田式浄化療法の効果

9 公衆衛生学的見地からのアプローチ

—全人的医療を進める診療所における外来患者の健康関連 QOL—

木村 友昭・中村 淳一

日本が長寿世界一になり、その記録を更新しつつある中で、QOL（クオリティ・オブ・ライフ、生活の質）が注目されるようになってきている。つまり、心身ともに健康で介護の必要がない状態で長生きできることが目標とされている。岡田式浄化療法、芸術療法や自然食による栄養指導などを取り入れた診療所にかかることによって、患者さんのQOLの維持や改善が期待されるが、その研究はまだ始まったばかりである。この研究レポートは、五月に川崎市で開催された第三回日本統合医療学会で発表した内容を中心に、取りまとめたものである。

同じ疾患にかかった患者さんでも、日常生活に支障の出ている人とそうでない人がいる。体の痛みや心の状態は本人でないと分からない。そこで、アンケート形式のSF-36というQOL尺度を用いて測定を行った。このアンケートの回答を集計して、8項目の得点を計算した。それらをもとに2つの総合得点が得られる（表1参照）。

- | | |
|-----------------------------|-----------------|
| ・ PCS 身体総合 | ■ PF 身体機能 |
| ・ MCS 精神総合 | ■ RP 日常役割機能(身体) |
| これらは、50点を平均として、偏差値で表示される。 | ■ BP 体の痛み |
| | ■ GH 全体的健康感 |
| | ■ VT 活力 |
| □右の8つのドメイン（下位尺度）は100点満点である。 | ■ SF 社会生活機能 |
| □性別・年代別に偏差値に変換する。 | ■ RE 日常役割機能(精神) |
| | ■ MH 心の健康 |

表1 SF-36の項目について

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

これまでの研究で、芸術を楽しむ人はQOLが高いことが明らかになっており¹⁴⁾、大仁瑞泉郷での健康づくりの日などの行事に参加することで、3ヵ月後のQOLが向上するというデータも出ている¹⁵⁾。本研究では、和歌山市にあるMOA中村クリニックの外来患者を対象に調査を行った。

平成13年6月から平成14年6月までの間に、387人(男性100人、女性287人)の方のQOLを測定した。平均年齢は55.6才で、高齢の女性が多いのが特徴である。疾患別にみると、高血圧症の患者さんが最も多く51例、以下、胃腸疾患(50例)、頸肩腕症候群(肩や首のこり)(34例)、脊椎症(26例)、高脂血症(25例)、精神疾患(24例)、糖尿病と心臓疾患

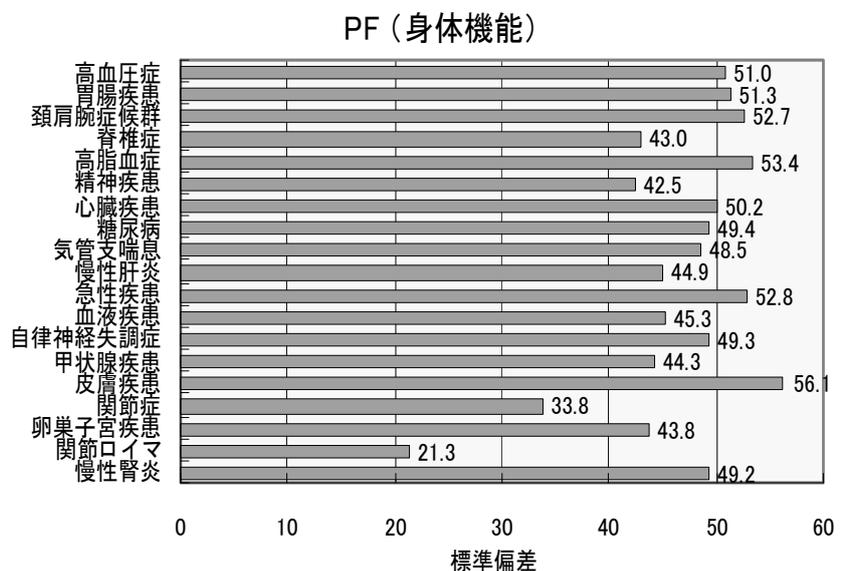


図18 身体機能についての疾患別の得点

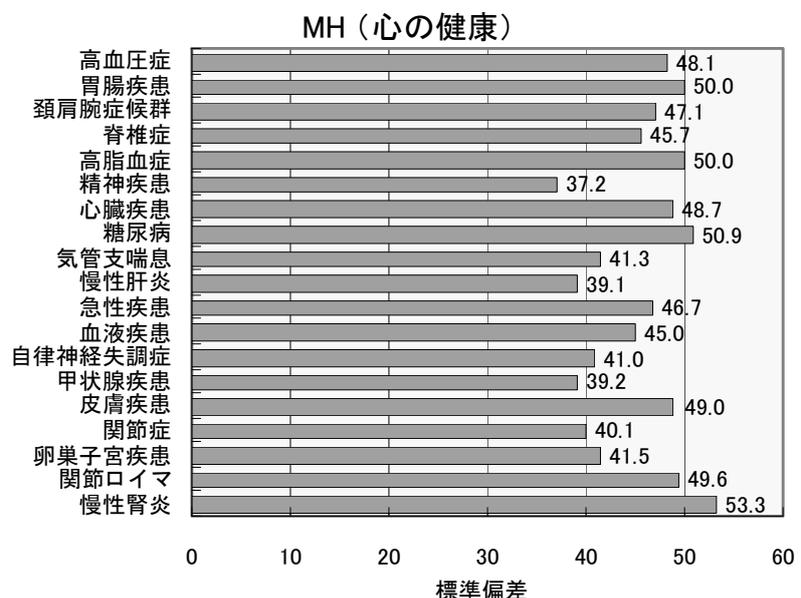


図19 心の健康について疾患別得点

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

(各21例)の順で、ほとんどが慢性の疾患であった。疾患別にQOL得点を比べてみると、図18に示すように、身体機能(PF)では、関節症と関節ロイマ(リウマチ)の患者さんが低く、運動や歩行などに支障が見られる。一方、患者さんの多い、高血圧症、胃腸疾患、頸肩腕症候群などでは、国民の平均値(50点)を越えている。図19に心の健康(MH)の得点を示すが、精神疾患、慢性肝炎、および卵巣子宮疾患の患者さんが低く、心の状態が不安やストレスなどで悪化していることが分かる。疾患によってQOL得点に特徴があるので、標準または高いQOLは、それを維持することが望まれ、低いQOLは改善に向けて取り組む対象となる。

次に同じ患者に、約半年後もQOL測定を行い、その変化を調べた。1回目の測定は、平成13年6月から12月に行い、2回目を平成14年1月から8月に行った。127人の患者のデータを分析したところ、ほとんど変化は見られなかった。図20に示すが、各項目が45点未満の人を対象として分析したところ、精神総合(PCS)と6つの項目で改善が認められた。これらのことから、半年間QOLが維持されていることは、全人的医療の成果であると考えられる。通常は、高齢で病気治療中の方のQOLは徐々に低下するが、慢性疾患患者の低いQOLの改善はなかなか困難なことが多いと言われている。

同じ疾患でも重症度が違うので、さらに疾患別に症例を検討していくことが今後の課題である。今回の研究の患者は、調査期間よりかなり以前から診療所を受診し、岡田式浄化療法をはじめとする治療を受けて、さらに自宅でもその健康法を実践されている。つまり、QOLがある程度改善されて、その維持の段階にある方が多いと言える。これまで岡田式浄化療法を受けていない方(初診の方)を対象に、さらにデータを蓄積していきたい。

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

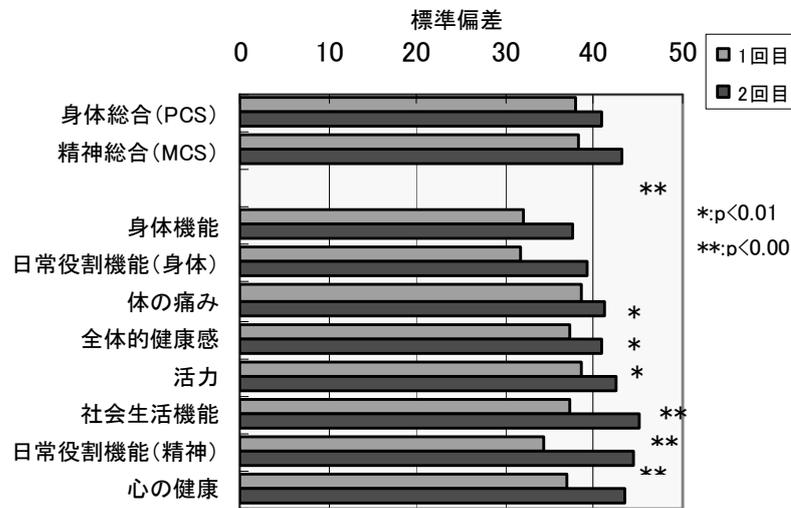


図20 QOLの低い患者の変化

10 まとめ

自然順応型の健康法の本質と仮定している Vital Energy の存在や働きを解明するためには、それを的確に評価できる「ものさし」が必要である。我々は、「ものさし」探しのために、電気生理学的なアプローチおよび生体光学的アプローチ、公衆衛生学的アプローチで、研究を行った。その結果、Vital Energy の存在を裏付ける様々な結果が得られた。しかし、我々は、その各アプローチでその存在がすべて明らかにされたとは思っていない。又、これまでの方法のみで評価できるとも考えておらず、更に多くの角度からのアプローチを積み重ねて、総合的に評価する必要があると考える。

今後は、現在行っている方法の洗練と、新しい計測法を考えている。例えば、熱コリの定量評価を行うために、サーモトレーサーや筋電図、背面筋肉の硬度計測が必要である。電気生理学的計測結果を裏付けるためには、内分泌物質や神経伝達物質、免疫機能等計測、fMRI による脳

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

機能計測も必要であると考える。

このような方法で Vital Energy の「ものさし」が確立されると、その働きがよく理解されるようになり、その働きを応用した自然順応型の健康法が、ヒトや社会に有効に使われるようになると考える。

本研究の「ものさし」だけで十分とは言い切れないが、Vital Energy がヒトの脳機能における α 波の増加や副交感神経活動の増加を促す効果を持つということが明らかになりつつある。 α 波の増加や副交感神経活動の増加は、ヒトの生理的リラクゼーションを意味することから、Vital Energy を積極的に利用した自然順応型の健康法は、効果的なストレス軽減法の一つとして有効であるといえる。

さらに、副交感神経機能の増加は、免疫機能の増加を齎すとの報告もあり、免疫機能や自律神経調節機能が低い疾患に対する、副作用が少ない治療法となりうる可能性があると考える。

我々は、自然順応型健康法を評価できる「ものさし」を探求しつつ、さらにその応用性を探るために、医療機関と提携して共同研究を進めることで、社会に貢献していきたいと考えている。

参考文献

- 1) Y. Ikemi : Integration of eastern and western psychosomatic medicine. Fukuoka, Kyushu University Press, 1996, 235.
- 2) 薛永斌:中国における健康法としての気功. 日本大学心理学研究, 15: pp. 20-27, 1994.
- 3) 新田和男:全人的医療「日本医術」の治病的効果. くろしお 高知大学黒潮圏研究所 所報, 9: pp. 10-20, 1995.
- 4) 林博史:心拍変動の臨床と応用. 東京、医学書院、1999、160.
- 5) 内田誠也、等:脳波および自律神経に及ぼす外気の効果 - 暗示効果と気の効果との違い -. 国際生命情報科学会誌, 20(2): pp. 453-465, 2002.

未知なる生命現象の可視化をめざして

2004年3月13日発行本「潜在能力の科学」からの転載
肩書き等は当時のものです。

- 6) 本山博：気の流れの計測・診断と治療。東京、宗教心理出版、1993.
- 7) 藏本逸雄、等：暗示、非暗示状態での非接触的效果による自律神経の変化。国際生命情報科学会誌 15(2)：pp. 330-341、1997.
- 8) 津田康民、等：岡田式浄化療法の効果定量化の試み(1) - 触診・問診による熱・コリ・苦痛の定量化。国際生命情報科学会誌 21(2)：pp. 349- 353、2003.
- 9) 内田誠也、等：キルリアン写真を用いた非接触的施術の効果の研究。国際生命情報科学会誌 14(2)：pp. 56-59、1996.
- 10) 柳川勉、坂口弘征、上野正博、他：生体機能維持能力と生物フォトン。国際生命情報科学会誌 18(2)：pp. 423- 447、2000.
- 11) T. Yanagawa, et al: Warm moxibustion and inner energy・ evaluation of living bodies using biophoton. Abstracts Global Enhancement of Acupuncture Research: pp. 120-121, 2000.
- 12) 白水重憲、等：指尖容積脈波カオスアトラクターと脳波トポグラフによる各種健康法の効果の評価。国際生命情報科学会誌 17(1)：pp. 150-155、1999.
- 13) 津田康民、等：花が心身に及ぼす影響について。第23回健康増進学会予稿集：pp. 94-95、2001.
- 14) T Kimura, et al: Is interest in art effective in health-related quality of life - Results of cross-sectional survey on lifestyle and health promotion -. Tokai J Exp Clin Med, 25(3): pp. 141-149, 2000.
- 15) 木村友昭、等：各種健康法が生活の質（QOL）に及ぼす効果—大仁瑞泉郷における健康増進プログラムの評価—。国際生命情報科学会誌 20(2)：pp. 594-597、2002.
- 16) H Sugano, et al: A new approach to the studies of subtle energies. Subtle Energies, 5(2): pp.143-166, 1994.
- 17) 菅野久信、等：脳波と気功。臨床脳波、 37(11)： pp.736-740、1995.